

ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンスと明治の近代化

石 山 洋

輸出貿易受難の時節を迎え、わが国繊維工業は危機に瀕している、と言っ
ては言い過ぎだろうが、新たな時代に入
ったといえよう。かつては、わが国の
最も花形産業であったこともあった。
その歩みを顧みるとき、まことに
世の移り変りの激しさを思い知るの感
にたえない。

わが国最初の工場制工業が確立した
のは明治16年(1883年)7月、操業を
開始した大阪紡績会社においてであ
る。300年の鎖国の夢をたった4隻の
黒船にさまされた日本が、まず経済的
に打撃を受けた最大のものは国産綿・
綿製品であった。手工業では対抗でき
ないままに、ずるずると輸入品の蹂躪
に任せていたが、維新の変革もおちつ
いてきた西南戦争後、政府もようやく
紡績保護に乗り出し、2,000 錘の紡績
所を官営、政府出資もしくは紡機購入
資金の政府代替払いなどの援助をして
十数箇所も設置したが、いづれも成績
が挙げなかった。それを10,000 錘の大
工場にすれば成功すると見通したのは
渋沢栄一(1840—1931)である。この渋
沢から依頼を受け、イギリス紡績織物
業の中心地マンチェスターで、自ら職
工の真似までして技術を身につけて帰

国、新紡績工場の支配人となって、工
場制工業を実際に運営したのは山辺丈
夫(1850—1920)であった。一昨年、こ
の山辺丈夫について調べたとき、筆者
はいささか興味深いことを見出した。

「冬になると野猪が城下に出て荒れ
まわる」と郷里について書いた森鷗外
と同じく、山辺丈夫は石見国(山口県)
津和野藩の出身である。維新後、同じ
く津和野出身の西周(1829—97)が東京
で新政府に仕えるかたわら開いた家塾
・育英舎に寄宿していた山辺丈夫は、
旧藩主の嗣子がイギリスに遊学するに
当って、家庭教師として同行した。そ
して、ロンドン大学で経済学を専修し
た。同じ西周の塾にいた親友津田東
が、西周と親交のあった渋沢栄一の紹
介で海上保険会社に勤務しており、そ
の吹き込みで将来、保険業経営の野心
を持っていたからである。それが再び
津田東のあっ旋で、一度も会ったこと
のない渋沢から紡績業研修を依頼され
ると、家庭教師は、折からロンドンで
化学研修中の杉浦重剛(1855—1924)に
バトンタッチして、機械工学へ転向す
る。そして、蒸気機関を動力源とした
近代的紡績工場を見事に運営した。し
かも、この工場では、エジソンの発明

した白熱電灯を全国の企業にさきがけて設備した。そして、紡績業者として大成し、「わが国工業の父」と仰がれるのであるが、彼がロンドン大学に学んだとき、その講筵で接したのが、新古典主義経済学の開拓者として経済学史に登録されているジェヴォンス (William Stanley Jevons, 1835—92) であった。彼の卓見「最終効用度 (final degree of utility)」の概念や当時から話題にこそなれ、承認はされなかった「太陽の黒点の増減によって経済恐慌はやってくる」という珍説を山辺丈夫は聴講していた。山辺丈夫の詳しい伝記、石川安次郎著『孤山の片影』大正12、読求519—22)によれば、「現に丈夫氏の保存せられたる手帳の中には、ゼヴォンス博士の貨幣学や経済学の講義の筆記と覚しき者があるが、その中に、太陽の熱と穀物の豊凶との関係を説き、それが世間の景気と一致せるを述べた者が有る。太陽の極熱せる年は、不景気の年なりとて、(*) 歐洲や米国の実例が引いて有る。ゼヴォンス博士は赤道直下の国は、太陽の極熱の爲めに、旱魃を来して、不作を免れず、それが世界の経済界に不景気を来すものならんと講じた様である。丈夫氏はこの講演には、特に興味ありし者の如く、詳かに筆記してある」という。

恐らく、日本人で、当時、この新しい経済学を直接学んだのは山辺丈夫ぐらいだったのではなからうか。というのは、ジェヴォンスがロンドン大学で

講じたのは1876 (明治9) 年から80年までの短期間に過ぎないからである。しかも、山辺丈夫は育英舎で、西周に有名な「百学連環」の講義を受けていたが、ジェヴォンスもすぐれた論理学者で、論理学も講じており、西周が説いたような科学概論の著書もあらわして、偶然ながら注意を引く (“Principles of science”, 1877, 読求 1—31)。筆者がジェヴォンスを始めて知ったのも、この面からであった。20余年前、加藤宗厚元上野図書館長から図書分類法の講義を受けた際、分類の論理について引用されたのが確かジェヴォンスであった。その講義の基底をなすセイヤース (W. C. Berwick Sayers “A manual of classification for librarians and bibliographers”, 1926) の説に採用されていたからであろうが、筆者は暫らくジェヴォンスを論理学者としてしか知らないでいた。閑話休題。とにかく、わが国でもやがて、ジェヴォンスの諸著作が紹介されて、明治における西歐的思考の一つの基盤を育成したのである。

山辺丈夫がロンドン大学に在学したのは明治10年10月から11年6月までの1年にも満たない間で、その後1月ほどキングス・カレッジで機械工学を学び、8月から翌年5月までマンチェスターの紡績工場で実習して、7月帰国した。その間に、わが国では、すでに美濃大垣藩主の出である戸田欽堂 (1850—90) によってジェヴォンス “Lo-

gic” (1876, 請求 57—6) が訳出され、
『論事矩 卷之一』として世に出ていた(明治12年6月, 請求 5—121)。それから十数年, 山辺丈夫は経済学よりも、むしろジェヴォンスの社会改良主義者としての労働問題に関する諸意見の恩恵に浴したらしい。そして、ジェヴォンスの論理学、経済学はひろく日本で訳述され、あるいは講義にとり入れられて浸透した。ジェヴォンス自身は知る由もなかっただろうが、彼の果たしたわが国近代化への業績は非常に大きかったのである。今、当館所蔵のその時期における訳書を列挙すれば、次の通りである。

<論理学> (カッコ内、当館請求記号)

『論事矩』戸田欽堂訳 明治12~16 和
2冊 (5—121)

『論理新編』添田寿一訳
明治16 (32—78)

『論理説約』桑田親五訳 明治16 和3
冊 (特35—208)

『論理学』戸田欽堂訳 明治19 (特21
—17)

『論理学容易独修』桑田房吉訳
明治21 (特21—19)

『普通論理学』和田万吉訳 明治26
増訂2版, 初版明治23 (21—130)

<経済学>

『^漢長経済論』安田源次郎訳 明治15
(25—156)

『経済初学』渡辺修次郎訳 明治17

(36—291)

『経済論綱』嵯峨正作, 古田新六訳
明治22 (38—45)

『経済学』杉山重威訳 明治22 (特15—
957)

<貨幣論>

『^日新貨幣説』大島貞益訳 明治27
(30—57)

『貨幣論』田尻稻次郎訳 刊年不明
(特70—321)

<労働問題>

『労働問題』吹田鯛六訳 明治26
(70—46)

なお、当館には、ジェヴォンスの原著も次のように所蔵する。

論理学：

“Logic” 1876 (57—6)

“Elementary lessons in logic,
deductive and inductive” 1877
(57—5)

“Principles of science. A treatise
on logic and scientific method”
1877 (1—31)

経済学：

“Political economy” 4th ed. 1884
(82—63), 同1898 (特28—066)

“Principles of economics. A frag-
ment of a treatise on the indu-
strial mechanism of society and
other papers” 1905 (330.1—
J 58 p)

“The theory of political economy”

1871 (I—45), 同 5th ed. 1957.

(330.1—J58 t5) (註1)

財政：

“Investigations in currency and finance” 1884 (1—58), 同 New ed. 1909 (特15—0389)

貨幣：

“Money and the mechanism of exchange” 1876 (1—555), 同 3rd ed. 1910 (特28—080) (註2)

社会問題：

“Method of social reform and other papers” 1883 (83—157), 同 1904 (304—J41m)

労働問題：

“The state in relation to labour” 1882 (38—136), 同 1910 (88—136 a), 同 4th ed. (特36—09)

伝記資料：

“Letters and journal of W. S.

Jevons” 1886 (43—162)

最後の伝記は、『マンチェスター・ガーディアン紙』の創立者の娘だった妻ハリエット・アン・ジェヴォンスの編集にかかり、異色の資料である。

註1 本書第2版(1879)の訳に『ジェボンス経済学純理』小泉信三訳 大正2(331.39—J44ウ)があり、第4版(19.11)の訳に『ジェボンス経済学の理論』小泉信三・寺尾琢磨・永田消訳 昭和19(331.39—J44aウ)がある。また、中国語訳として、第5版(1957)について『経済学理論』瞿荊洲訳 民国57(1968)(331.35—cJ58k2—K)がある。

註2 本書の新しい訳として『貨幣及び交換機構』松本幸輝久訳 昭和23(a336—6)がある。

(いしやま・ひろし：整理部分類課
課長補佐)